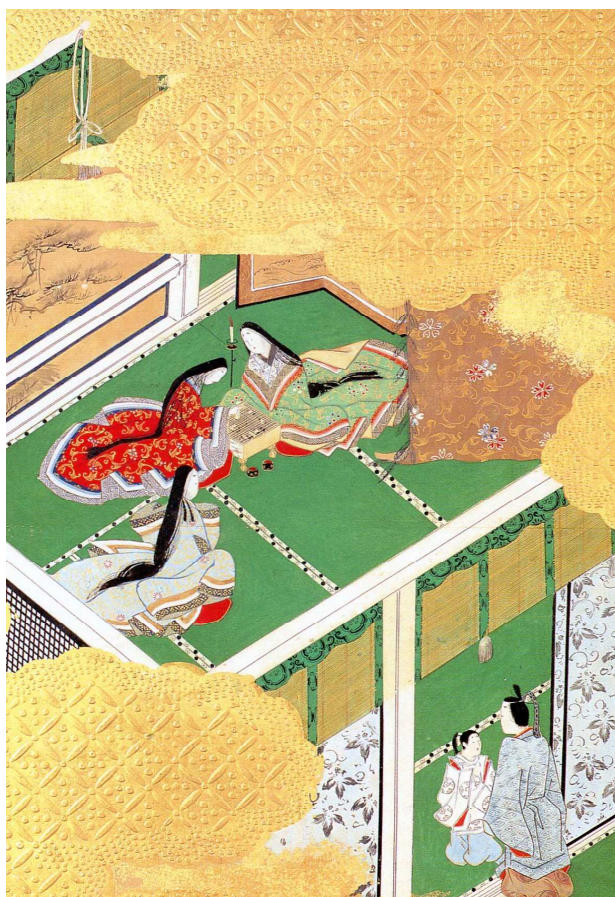


第133回貴重書展示

大学創立五〇周年記念

# 源氏物語のあそび



平成25年1月23日(水)～2月19日(火)

**鶴見大学図書館** エントランスホール

\*会期中で若干の展示替えを行います

前期 1月23日～2月4日

後期 2月5日～2月19日

鶴見大学図書館・源氏物語研究所

後援：紫式部学会・武蔵野書院

あけましておめでとう存じます。

新春恒例の貴重書展示は、源氏物語研究所の担当です。本年は大学創立50周年にあたりますので、それを記念して会期を少し延長、途中で若干の古典籍を入れ替えます。どうぞ幾度でもお越しくください。

さて、繰り返し申し上げております通り、当研究所の最大の仕事は、『源氏物語』とそれに関連する分野について質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確な調査を行うことにあります。華やかに打ち出される言説や、あるいは犀利を装った所謂現代的な議論は、しばし人目を驚かすことはあっても所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代わられます。時を超えて学問を支え、豊かな源泉となって研究を潤し続けるものは、古典籍をおいて他に見あたりそうもありません。研究所はこれまで蓄積された蔵書の錦にさらなる花を加えるべく、限られた予算を最大限有効に活用し、目録を眺め回し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めます。その結果、学界のみならず一般にもよく知られるところの、本学の優秀な貴重書コレクションが形成されました。長い間離ればなれになっていた書物がここ鶴見で再び一緒になる、といったことも起こります。これも継続的な集書の成果です。

今回は、『源氏物語』の中から、さまざまな「遊び」を取り上げました。現在も人気のある囲碁、ちょっと品格高い楽器の演奏、舟を浮かべて優雅な遊び。それらは、しばしば筋の運びに重要な役割を果たし、時に洒落た点景となり、「遊び」のみに限っても、多彩で豊かな世界が広がってゆきます。お目にかける書物を選びながら、あらためて『源氏物語』の懐の深さを感じた次第です。

では、ごゆっくりとお楽しみください。

平成癸巳青陽下浣

源氏物語研究所

高田 信敬

\*立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館の典籍のみでは足りない箇所に個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

# 源氏物語のあそび

○ = 前期のみ展示

● = 後期のみ展示

\* = 個人蔵

## 展示目録

### I 盤上遊戯・物合

- 1 蒔絵筆筥入源氏物語 空蟬 江戸時代前期写 列帖装54冊
- 2 奈良絵 空蟬 江戸時代前期制作 額装1面
- \* (参考)空蟬図小柄 江戸時代中期 1本
- 3 源氏物語系図 伊達伯爵家旧蔵 江戸時代中期写 袋綴1冊
- 4 掌中源氏物語 天保8年(1837)刊 薄様刷り横本 袋綴1冊
- 5 おさな源氏 寛文10年(1670)刊 袋綴10冊
- \* 6 奈良絵本源氏物語 絵合 江戸時代前期写 列帖装1冊
- (参考)絵入栄花物語 江戸時代中期刊 袋綴9冊

### II 鷹狩り・蹴鞠・船遊び

- 7 絵入源氏物語 松風 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊
- (参考)伊勢物語画帖 江戸時代前期写 折本1冊
- 8 源氏物語 松風 慶長19年(1614)里村玄仲筆 列帖装1冊
- 9 湖月抄 若菜上 薄様刷 和田維四郎旧蔵 延宝元年(1673)跋 袋綴11冊
- 10 河海抄 江戸時代初期写 巻1欠 袋綴19冊
- 11 源氏物語絵巻 胡蝶 天保2年(1831)幽遠斎画 卷子本3軸
- 12 古活字版源氏物語 胡蝶 伝嵯峨本 慶長頃(1596~1615)刊 袋綴1冊
- 13 源氏物語 浮舟 江戸時代前期写 未装継紙1巻

### III 管絃の興趣

- \* 14 小型本絵入源氏物語 帚木 江戸時代前期刊 袋綴60冊
- 15 奈良絵本源氏物語 明石 江戸時代前期写 列帖装1冊
- 16 源氏物語抜書 若菜下 中院通茂筆 卷子本1軸
- 17 源氏小鏡 文林堂須原屋茂兵衛版 江戸時代中期刊 袋綴1冊
- 18 横本絵入源氏物語 若菜下 万治3年(1660)刊 袋綴29冊
- 19 源氏物語 橋姫 色替外題本 江戸時代前期写 列帖装54冊
- 20 袖中絵本雛源氏 合羽刷り 丁子屋源治郎版 江戸時代後期刊 袋綴1冊

### IV 源氏物語に取材した遊び

- \* 21 源氏品さだめ 江戸時代末期刊 結び綴1冊
- (参考)雑道具 投扇興 点取り表・蝶・扇等1式
- 22 源氏歌留多 塗箱入 江戸時代後期 読札・取札とも108枚1組
- 23 源氏かるた絵合 洗心斎池田綾岡画 江戸時代後期刊 1舗
- 24 源氏物語双六 (付)うちやうの事 桐けんどん箱入 江戸時代後期刊 袋綴28冊・1舗

## 解題

### I 盤上遊戯・物合

平安時代には、盤を使った様々な遊びがありました。囲碁・将棋・双六・弾碁から八道行成（十六武蔵のような遊具か）など珍しいものまで多士済々ですが、『源氏物語』に描かれるのは、囲碁と双六（将棋が出てこないのは無念）。現在も人気の高い囲碁は、当時女性にとっても好まれ、浮舟はなかなかの打ち手です。ここでは、物語中もっとも知られた囲碁の名場面（空蟬）と近江君の双六遊び（乙女）、華麗な美の争い（絵合）をお目にかけます。

#### ○ 1 蒔絵筆筒入源氏物語 空蟬 江戸時代前期写

列帖装 54冊

金泥・金箔を贅沢に使った下絵装飾縹色紙表紙（縦23.7、横16.7糎）、その左端に押し発装あり。表紙中央に金泥下絵絹地題簽（縦14.9、横3.0糎）を貼り、「桐つほ」以下の巻名を墨書する。これは本文の書き手より一段上の能筆。見返し、卍繋ぎ艶刷り金紙。本文料紙は厚手上質の斐紙を用い、毎半葉10行を原則とするが、花散里・関屋・篝火は8行書き。これらの巻は量が少ないので、墨付き丁数を増やし書物としての体裁を整えるためであろう。ままた朱の合点・句読点を付す。華麗な装丁の書物であると同時に、見応え十分の調度品ともなっている。

本文は青表紙本系肖柏本・三条西家本と近い。朱句読点を持つ『源氏物語』は河内本であることが多いけれども、掲出本は青表紙本系。元糸は紺であつたらしく、綴じの切れた帖を紫絹糸で装丁し直しているが、空蟬・夕顔・若紫・関屋・絵合・胡蝶にやや複雑な錯簡を見るのは、その際の不手際か。

典籍と共に注目すべきは、これを収める蒔絵筆筒。蓋オモテ・側面・背面に仙翁を主要題材とする秋草金銀蒔絵が施され、螺鈿や蒔絵で巻名を流麗に表現する。天板中央の提鑲や扉上部の唐草を彫った鍵金具は銅鍍金であろう。この優雅な作例とほぼ重なる意匠を持つのが静嘉堂文庫の歌書筆筒であり、同じ工房の製作と見られる。仙翁は、桃山時代から江戸時代中期にかけてしばしば用いられる題材で、漆芸史の専門家によれば、17世紀後半、大名の息女が輿入れに持参したものではないか、と言うことであつた。現在離ればなれとなっている典籍収納用の箱が、共通の工匠の手から生まれたとわかるのは、とてもおもしろい。

展示箇所は、空蟬と軒端荻が碁を打つ有名な場面。見開き右面2行目「めすこしはれたり（「るの誤写）」心ちしてはななどもあざ／やかなるところなうねびれてにほはしき所も見え／ずいひたつればわろきによれるかたち」は空蟬、5行目「にぎはしくあひぎやう／つきおかしげなるを」は軒端荻の容貌描写である。

#### 2 奈良絵 空蟬 江戸時代前期制作

額装 1面

型押し金箔を雲形に切り抜き、画面上下に配した極彩色の大和絵（縦57.8、横47.7）

3 糎)。金箔散らしの霞は後補らしく、もとは屏風のような大画面の一部であったろう。顔料の落剥もほとんどなく、保存良好。屏風や襖絵を切り取って軸・額・画帖に仕立てる例は少なくないので、この種の絵画資料調査にあたっては、現在の状態にとらわれず多角的に考察することが必要である。絵全体は純然たる大和絵だが、画中のふすまや屏風は狩野派風の墨絵となっており、異種の画風が共存するところもおもしろい。しかし奈良絵においては珍しい現象ではない。

光源氏 17 歳の夏、空蟬と軒端萩を垣間見、と言うより、御簾が上げられたままなので、直接的観察である。脇に立つのは空蟬の弟小君。軒端萩は『源氏物語』の本文によると「白きうすものひとへがさね、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へるきはまで胸あらはにばうぞくなり」と随分くだけた服装のはずだが、掲出の絵では空蟬と共に端正な女房装束で描かれる。

**\* (参考) 空蟬図小柄 江戸時代中期**

1 本



艶のある赤銅地に細かな魚子を打ち、オモテ金覆輪、ウラ金哺み（縦 1.5、横 9.6 糎）の小柄。江戸時代後期の精緻な作品で、左側に空蟬と軒端萩の対局姿、右側に光源氏を彫り上げ、庭に遣り水が流れる。その技は驚異的と言うほかになく、碁盤の上には碁石がちゃんと据えられ、女性の意匠も細部まで丁寧に仕上げている。光源氏左の御簾に至っては、なんと約 1 糎幅のところに 30 本ちかく横線を刻む。

**3 源氏物語系図 伊達伯爵家旧蔵 江戸時代中期写**

袋綴 1 冊

薄藍色地に草花・土坡・柴垣・霞等の金銀泥下絵を施した布目紙表紙（縦 32.2、横 22.5 糎）は、大名家伝来にふさわしい大きさと豪華さをそなえたもの。押し発装あり。5 目綴じ表紙左肩に「源氏系図」と打ち付け書きするのは、本文と別筆らしい。落剥・虫損あるも補修済み。見返しは墨流し装飾斐紙に水辺を描いた金泥下絵。これも制作当時のままであり、東北雄藩の力をうかがわせる。巻頭上部に「伊達伯／観瀾閣／図書印」の蔵書印を押す。伊達家旧蔵。奥書・識語等はないが、書風から見て江戸時代中期か、それをやや遡る時期の制作であろう。帙に「歌書第八百五号(朱)／源氏系図壺冊(墨)」の楮紙片（縦 15.1、横 3.5 糎）を貼るのは、旧蔵者の整理用付箋か。

本文はごく上質の斐紙を用い、墨付 29 丁、遊紙なし。淡墨の 4 周単辺（縦 22.5、横 19.2 糎）中を 7 行に画し、朱の系図線を引く。界間（約 2.7 糎）に 2 行あての人物説明、漢字平仮名交じりとし、漢字にはまま振り仮名、平仮名には濁点を打つことが多い。通常系図末尾に置かれる「不入系図人々」を略し、「太上天皇」から「大輔命婦」までを写す。本文のあり方を見ると、**7 絵入源氏物語**付録の文亀 3 年本系図を利用したと推され、研究上の価値は必ずしも高くないけれども、しかし『源氏物語』享受史・書物文化史、あるいは大名家の学芸を考える上での意味は重い。

展示箇所は権中納言の家系。左衛門佐（もとの小君）と空蟬君の姉弟が掲げられ、「父中納言うせて後いよのすけがつまになり又ひたちに／なりてくだりし時ぐしてくだりせき



やに京へのぼり／て同巻にすけにおくれて後尼になりて二条院の／東のみにすみき」と空蟬の半生を簡潔に語る。

#### 4 掌中源氏物語 天保8年(1837)刊 薄様刷り横本 袋綴1冊

砥粉色地に渋引き紙表紙(縦7.0、横16.7糎)4目綴じ横本、角裂は紫。表紙左肩に緑色紙題簽(縦5.3、横1.1糎)を押し、単郭中に「掌中源氏物語」と刻す。見返し、本文共紙。最終丁ウラに「天保丁酉歳正月／京 額田正三郎／江戸 須原屋茂兵衛／大坂 葛城長兵衛／歌書類／薄様摺 美濃紙摺／本出来御座候」の刊記があり、天保8年(1837)の出版。斐紙薄様を用いた特製本。薄様刷りの版本は一般に墨付きが悪いけれども、掲出本の版面は鮮明である。

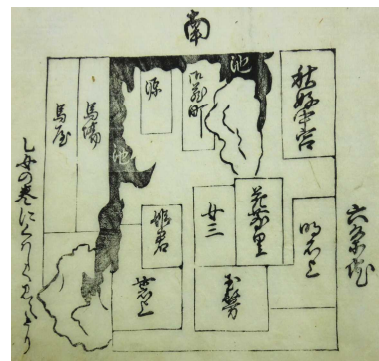
本文は4周単辺(縦5.8、横14.6糎)内に22行前後を刷り、版心は「○ 一(～六八)」、第20丁以降しばしば「十」を省略して「三一」「五四」等と刻するのは、表記史上注意される場所である。『源氏物語』の概説(1～7丁ウラ)・登場人物一覧(8～54丁オモテ)・故事一覧(54丁ウラ～68丁オモテ)の構成であり、配列にイロハ順を採用、検索の便をはかっている。いかにも『群書一覧』の編者尾崎雅嘉(1755～1827)らしい工夫と言えよう。現在よく見られる50音順人物索引の先駆けとして、評価できるものである。

見開き右面は「あ」の部、「秋好中宮・あげまきの大君」と続き、「近江の君」が見える(「あふみのきみ」ですので、「あ」の部に所属)。説明はやや詳しく、左面2行目「五節とて／わかき人と双六うちて. いとせち／にてをもみて. 小さい／といふこ／ゑぞいと舌はやき」とある。早口・双六好き・濃い化粧・調子外れの和歌がこの人の特徴であり、憎めない脇役として描かれる。

#### ● 5 おさな源氏 寛文10年(1670)刊 袋綴10冊

藍色無地紙表紙(縦27.0、横18.3糎)、第7冊(四之上)にはかすかに押し発装の痕跡が残る。表紙左肩に厚手の紙題簽(縦17.3、横3.5糎)があつて、「おさなけんし きりつほより／ゆふかほまで 一之上」と刷り、「おさなけんし 宇治十帖 五之下」に至る。5目綴じの原装ながら、若干の虫損が惜まれる。通常『おさな源氏』は5冊仕立てとするが、掲出本は10冊、宇治十帖(五之上・五之下)は宿木巻の途中から不自然な分冊となっていて、初出の形態ではなかろう。第10冊最終丁ウラに子持ち枠(縦17.8、横5.7糎)を設け、「寛文十庚戌歳孟春吉旦／書林山本義兵衛梓行」の刊記。『おさな源氏』としては、寛文6年版に次ぐ印行である。

巻頭に著者雛屋(野々口)立圃(1595～1667)の序と主要人物の略系図、第3丁オモテ以下『源氏物語』巻順に梗概を述べる。原文を平易に紹介するのみならず、より親しみやすくするために、自作の絵122図を入れ、初心者あるいは女性読者に広く支持されたく、10種ほどの版を見る。右図は第3冊巻頭の六条院図であり、この種のものとしては最も早い例のひとつ。図の正確さはともかくも、編者の創意が看取されよう。立圃は以前『おさな源氏』の類似作『十帖源氏』をまとめており、掲出本は先行する『十帖源氏』に依拠したものである。



第5冊常夏巻、見開き左面に双六を打つ女性が描かれる。近江君と五節君は『源氏物語』本文に出てくるが、あと一人は誰であろうか。右面1行目「此あふみの君は五せちの君とすぐ六ノをそ打ける」がそれに対応する粗筋、ついで「草わかみひたちのうみのいかゞさき／いかてあひみんたごのうらなみ」と言うすさまじい和歌を載せている。

#### \* 6 奈良絵本源氏物語 絵合 江戸時代前期写

列帖装1冊

濃紺地に金泥にて土坡・秋草・蝶等を描き、金野毛・箔蒔きなどの豪華な装飾を施した紙表紙



(縦24. 0、横17. 7糎)は原装のまま。表紙左肩に金泥下絵朱題簽(縦14. 8、横3. 4糎)を押し、「ゑあはせ 十七」と墨書。本文と同筆である。巻毎に表紙意匠を変えるが、その絵柄は巻の内容と連動しない。見返しの金布目紙や本文料紙の斐紙もごく精良なものを使い、贅を尽くした所謂嫁入り本。

毎半葉10行17字程度、漢字平仮名交じりの温和な書風。この書き手は、他にも奈良絵本類の本文をいくつか書写している。絵の前で散らし書きとするのは、余白が生ずるのを避けるための手法であり、奈良絵本にしばしば見られる。本文23丁、遊紙前1丁・後2丁、濃彩の絵2面。絵柄は7 絵入源氏物語と一致し、本文もまたこれに依拠したと推される。

展示箇所は、清涼殿西面。冷泉帝の御前で弘徽殿女御方と光源氏の後援する梅壺女御方とが絵のできばえを競うところである。ただし女房達の姿はなく、帝・侍臣と唐櫃が描かれるのみ。最後に出された源氏の須磨流謫日記絵が勝負を決める。

#### (参考) 絵入栄花物語 江戸時代中期刊

袋綴9冊

薄縹色布目紙表紙(縦25. 9、横18. 6糎)に大型の藍色紙題簽(縦19. 1、横6. 9糎)を押し、「栄花物語 目録并系図」等と刷る。なかなかの美本ではあるが、やや後印。見返し、本文共紙。本文料紙、楮。無辺無界、版心部分に文字なし。公家風能書の版下で毎半葉12行24字程度とし、まます人名を細字付刻。各冊巻首に「栄花物語二ノ浦々のわかれ」の如く内題を示す。挿絵は精緻優美、これを粉本として絵入りの『古今和歌集』が刊行されたのも納得出来よう。刊記なし。平成元年(1989)度日本文学科卒業生より寄贈された典籍。

最終冊末尾に、「いにしへよりつたふる物語の中に」以下の跋文1面分9行を付す。『伊勢物語』や『源氏物語』に対し『栄花物語』こそ代々の鑑となるものであるがゆえに、抄出して座右に備えたと言う。全40巻を要領よく抄出、読みやすい9冊本にまとめるが、巻15うたがひ・巻20御賀はそのまま収載。流布本第1種を礎稿に、古本第2種をも参看して表現を整えたい。享保(1716~1735)頃かと推される出雲寺和泉刊本・文化3年(1806)向井八三郎刊本・無刊記本に大別され、掲出本は無刊記本。ただし無刊記本にも数種あって、出雲寺和泉刊本と拮抗するほどの刷りのよい伝本も見られる。

展示は、第1冊月の宴から。村上天皇の御前で様々な遊びに興ずる女房達を描く。見開きのゆったりとした画面左下に、珍しい遊び「いしなご」(いしなとり)が見える。

## II 鷹狩り・蹴鞠・船遊び

源氏物語には、屋外での活発な遊びも、勿論描かれます。鷹狩りには、山野の風趣を尋ねる楽しみもありました。蹴鞠に熱を入れ常軌を逸する貴族も少なくありません。これらは男性の領域ですが、船遊びとなれば、女性も参加しています。ほとんどの場合、自然描写が伴いますので、これも味わいどころでしょう。

### 7 絵入源氏物語 松風

慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

藍色無地紙表紙(縦27.0、横18.2糎)中央に楮紙題簽(縦16.7、横3.4糎)を押し、巻名・巻序等を刻す。本文は匡郭なく、毎半葉11行22字程度。句読点・濁点を付し、しばしば人名・官職名・地の文と心内語の区別も示す。山本春正(1610～1682)の手になる大和絵風の挿絵は、4周単辺(縦18.7、横14.5糎)内に片面・見開きの両様。夢浮橋末に「承応三甲午稔八月吉日／洛陽寺町通／八尾勘兵衛開板」の刊記。出版を企画し挿絵を描いた山本春正は当時著名の蒔絵師、松永貞徳(1571～1653)の和歌の弟子でもあった。

物語54冊に山路の露1冊・系図1冊・引歌1冊・目案3冊を加え、60冊仕立て。親しみやすい絵柄と付録6冊の便利さで、後世に対し大きな力を持った。6奈良絵本源氏物語も、その影響を受けた作例である。

見開き左面は桂の山荘を頭中将・兵衛督らが訪れたところ。鷹狩りの獲物である小鳥を荻の枝に付け、狩衣に靴の狩装束が描かれ、右面本文4行目「けさ露をわけてまいり侍る。山の錦はまだし／う侍りけり」以下「ことりしるし斗(ばかり)／引つけたる。おぎのえだなどつとにしてまいれり」(10～11行)に対応。

### (参考) 伊勢物語画帖 江戸時代前期写

折本1冊

奈良絵本『伊勢物語』の絵のみ22面分が本学図書館に入り、折本(縦33.2、横24.1糎)として仕立てられた。天地を銀と薄藍の霞・金揉箔装飾とし、大和絵風濃彩の絵(縦23.7、横16.4糎)が中央に収まる。おそらく『伊勢物語』を上下2冊に書写したものの下冊分であろう。

見開き右面は第82段交野の狩、左面は第83段小野の雪の2場面。絵柄は嵯峨本『伊勢物語』の挿絵に一致し、6奈良絵本源氏物語と同じく版本に依拠した奈良絵本の作例である。

### ○ 8 源氏物語 松風 慶長19年(1614) 里村玄仲筆

列帖装1冊

白地に網・洲浜を藍刷りした斐紙表紙(縦24.2、横17.4糎)の中央に金銀泥の薄と銀箔の月を下絵とする題簽(縦15.5、横3.0糎)があり、「まつかぜ」と墨書。残念ながら洒脱な表紙は後補改装だが、装飾題簽は制作当初のものを襲用しているかもしれない。遊紙、前後に各1丁、墨付24丁。本文料紙、斐。毎半葉10行20字程度、和歌2字下げ2行書きとし、その末は地の文に続く。本文系統は青表紙本系三条西家本・肖柏本にほぼ同じ。朱の句読点・合点あり。



最終丁オモテに「宗礪老依所望不省悪筆書写畢／慶長十九年初秋中旬／法橋玄仲」とあり、制作の事情を語る。『源氏物語』全巻が散佚し松風1帖のみ残されたのではなく、この巻に限って書写したのであろう。題簽もまた、依頼主の注文に応じたものではないか。玄仲(1578～1638)は連歌界に君臨した里村紹巴(1525～1602)の次男、父にやや似た筆跡である。玄仲の自筆資料と比較するに、奥書通り掲出本の筆者と認めてよい。

奥書に見える宗礪(?～1625)は、加藤清正(1562～1611)に儒学をもって仕えた文化人。清正没後竜安寺多福院にあつて書物を集め、「多福文庫」を形成した。今日では忘れられた存在であるが、江戸時代初期の文学や歴史を考える上で、大切な人物と言えよう。掲出本が写された慶長19年は、帰洛してまもなくの時期である。ただ1冊の書写を依頼した理由はよくわからない。なお宗礪については、長坂成行「篠屋宗礪と多福文庫旧蔵本」(『汲古』62)およびそこに掲げられる文献参照。

展示は、若公達が桂の山荘に光源氏を訪問するところ。見開き左面4行目「御車のしりに頭中将兵衛督のせ給」、9行目「なにがしの／朝臣の小鷹にかゝづらひて立をくれ侍ぬる」と見える。

## 9 湖月抄 若菜上 薄様刷 和田維四郎旧蔵

### 延宝元年(1673)跋 袋綴11冊

紺色無地羅表紙(縦30.4、横21.7糎)中央に金銀揉箔散らし絹地題簽(縦20.6、横4.9糎)を貼り、「湖月抄 表白 年立上下 雲かくれ 系図」の如く墨書。見返しは金銀揉箔散らし斐紙。本文は4周単辺(縦23.4、横17.5糎)、これを上下2段に分け、上に頭注、下に本文と傍注を刻す。本文行数12行。夢浮橋末尾に北村季吟(1624～1705)の跋文と刊記「書林 林和泉／村上勘兵衛／吉田四郎右衛門／村上勘左衛門」。

『湖月抄』は60冊仕立てとすることが多いけれども、薄様を用いているために11冊で全編を収載出来る。5目綴じ、改装。各冊最終丁ウラ左下に「雲邨文庫」の印があり、和田維四郎(1856～1920)の旧蔵と知られる。和田は地質学者として聞こえ、政財界に強い影響力を持った。善本稀書の収集面でも著名。

掲出本は本文を上質の薄様料紙に刷った特製本。通常的美濃版より大きく豪華な装丁から見ても、豪商あるいは上級武家の注文品か。『源氏物語』各巻ごとに紫色斐紙を1葉挟み込み、隔てとする。蔵書印の位置から見て、改装後に和田維四郎が入手したと推される。

汗牛充棟の『源氏物語』註釈書中『湖月抄』が最も流布したので、ごくありふれた書物のように思われているが、初印本と判断できるものに出会ったことはない。世上に見かける本のほぼすべては葵巻の誤脱を埋木訂正した後印本であり、未修正の伝本はきわめて少なく、これすら初印と言えるかどうかわからないのである。先行する未修正版の刊記は、「吉田四郎右衛門」のところに「八尾甚四郎」の名が刻されるので、両者容易に判別可能。掲出本もまた、後印本である。

展示は若菜上、「やよひばかりの空うららかなる日」の六条院における蹴鞠の場面。柏木衛門督・夕霧大将ら若人が集まり、活発な遊びに興じる。見開き右面終わりより2行目「大将の君もかんの君も。みなおりみて。えならぬ／はなのかげにさまよひ給ふ。夕ばへいよきよげ」であった。すると唐猫の綱が御簾を引き上げ、柏木は女三宮の姿を見てしまおうと言う、有名なくだりの直前である。

## 10 河海抄 江戸時代初期写 巻1欠

袋綴19冊

藍色紙無地（縦26.5、横20.7糎）のやや幅広な表紙は、江戸時代初期頃の書物によく見かけるもの。その左肩に茶地蠟箋加工の題簽（縦15.3、横2.7糎）を押し、「河海抄 二 帚木 うつ蟬 タ顔」と墨書するのは、巻5の筆者であろう。毎半葉13行30字程度、漢字平仮名交じりで丁寧に写す。巻1の序・料簡・桐壺欠。

各冊首に「矢野蔵書」、尾に「月明荘」の朱印。後者は反町弘文荘の所用印であるが、『弘文荘待買古書目』には載せられていない。全体を6人ほどで分担書写し、巻18のみ朱の書き入れあり。巻6は表紙・外題とも他の冊と異なるので、取り合わせ本か。ただし、それほど下る時期のものではなかろう。奥書・識語等なし。

『花鳥余情』と並び称せられた中世『源氏物語』古註釈の雄編。「河海ハ細流ヲ厭ハズ、故ニソノ深キヲナス」の金言によるのであろう。膨大な文献を引用し、まさしく「細流ヲ厭ハズ」の感がある。散佚した資料の復元や引用から見た古典の享受研究など、利用価値の高い書物。伝本は大きく中書本と覆勘本に分けられ、掲出本は中書本に属する。

巻若菜上を展示する。見開き右面8行目「まりもてあそばしてみ給」に「劉向別録曰蹴鞠者伝之黄帝」以下の注が付く。唐猫がもたらした小さな出来事は、女三宮と柏木との悲劇に発展する。その発端がこの蹴鞠の場面である。

## ● 11 源氏物語絵巻 胡蝶 天保2年（1831）幽遠斎画

卷子本3軸

薄手楮紙（縦28.6、横約38糎）を上13紙・中20紙・下21紙継いだ卷子本。1紙1図の設定で全54図。ただし橋姫巻に2図あり、椎本巻に相当する図がない。継紙のまま当館に入り、3軸に仕立てられた。その題簽は、本学名誉教授貞政少登先生（前独立書人団理事長・日展審査員）のご揮毫にかかる。

上巻冒頭に厚手楮紙（幅約5糎）を加え、「源氏五十四帖 探幽」と墨書。続いて絵師幽遠斎の識語「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同 中／同 下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写」がある。汚れが目立つので、元来これが継紙を包み、表紙の代用となっていたのであろう。「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同 中／同 下／以上六十帖」の記述は、7 絵入源氏物語の特徴と合致し、掲出絵巻の図柄も確かに絵入本と無縁ではない。しかし絵入版本を狩野派の巨匠探幽（1602～1674）が模し、彩色したとは考えにくいのではないか。管見の限り、探幽の模本類にもその徴証は見当たらない。絵師幽遠斎については、狩野派を学んだことは確かだが、他に1作を知り得たのみで詳細未勘。

掲出の絵巻は作画の枠組みを絵入本に求めており、細密濃彩の大和絵風原図を漢画の強い筆法で解釈し直していたり、左右を反転させたり、絵巻らしい横長画面に加工したりと、様々な工夫を凝らす。淡い色調も瀟洒な魅力を湛えている。

展示箇所は、胡蝶巻。梅が綻ぶ六条院では、南池に龍頭鷓首の舟が浮かぶ。楽太鼓や鳥兜を着した楽人の姿が見え、女房達は小舟に乗って春の風情を楽しむ。

## 12 古活字版源氏物語 胡蝶

伝嵯峨本 慶長頃（1596～1615）刊

袋綴1冊

薄黄色具引き斐紙表紙（縦27.2、横22.0糎）は原装、押し発装あり。その中央に雲母にて唐草を刷った高雅な題簽（縦18.2、横2.9糎）を押し、「胡てふ」と刻す。右下の

「廿四」は後人の書き入れ。全20丁每半葉11行22字程度(印刷面縦約22.5、横17糎)に本阿弥光悦風の闊達な活字を組む。版面の印象も書体も、慶長期らしいおおらかな魅力にあふれている。

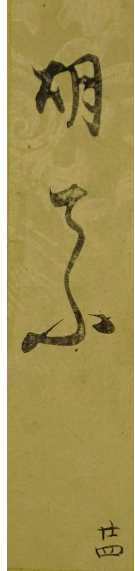
嵯峨本と目されるだけあって、装丁・印刷とも美麗、惜しいことに若干の虫損あり。補修済み。

巻首に「瀨能／蔵書」「飯山／八幡／宮／之印」「臨野堂文庫」の蔵書印を押す。前田夏蔭門下の国学者瀨能正路(1807～1870)の旧蔵である。

昭和50年(1975)東京古典会主催の入札会に出品された時には51冊まとまっていたが、散逸。当研究所では、蔵書印・装丁から判断してツレとなる12帖(花宴・花散里・松風・朝顔・螢・篝火・野分・横笛・夕霧・御法・紅梅・浮舟)を集めたけれども、伝嵯峨本を始め古活字版は最近高値になりすぎたので、今後どれほど散逸前の状態に近づけるか、限られた予算では難しいところである。なお以上の伝嵯峨本はすべて原装。また本学図書館には掲出本のツレではない2冊の伝嵯峨本(朝顔・真木柱)や寛永頃刊行の古活字版『源氏物語』(2冊補配)を所蔵する。

見開き右面5行目「風ふけば浪の花さへ色みえてこやなにたてる／やまぶきのさき」以下4首、船遊びの女房達が詠じた和歌を載せる。「生けるほとけの御国」と讃えられた六条院南の町の春は、どこまでもうららか。左上図版は

外題。白く具引きし、雲母で唐草文様を刷る。



### 13 源氏物語 浮舟 江戸時代前期写

未装継紙1巻

大判料紙(縦36.2、横約49糎)20枚を継ぎ、各紙32行を最大とし28字程度(字高約29糎)書写。書き入れなし。料紙は間合風のやや厚手のもの17枚、薄手斐紙3枚を使用し、それぞれ別筆のようである。薄手斐紙部分(第6・11・20紙)は補写の可能性あり。第6紙のみはウラ面にも書写する。

余白を大きく取る箇所があり、絵巻詞書として用意されたものか。欠脱を生じ、別料紙をもって補われたらしい。未装丁のまま伝来し、現在仮の軸に巻く。本文系統は青表紙本系だが細部で異なりを見せるので、なお詮索を要す。

匂宮と浮舟を乗せて、橘の小島にはかなげな船が漕ぎ寄る。二人の贈答と余白部分を展示した。余白には、絵が想定されるところである。終わりから9行目、匂宮の語りかけと和歌が見える。「かれ／見給へいとかなけれどちとせもふべきみどりのふかさ／をとの給て／としふともかはらんものかたち花の／小島のさきにちぎる心は」。返歌「たち花の小島はいろもかはらじを／このうき舟の行衛しられぬ」によって、彼女の呼称「浮舟」は生まれた。

### Ⅲ 管絃の興趣

「あそびは夜、人の顔見えぬほど」とは、清少納言の名言。音楽は、平安時代貴族の遊びの典型です。使用する楽器は何か、どのように演奏するか。それによって趣味や教養、人柄まであらわになってしまうこともあります。管絃の遊び描写に見られる紫式部の筆の冴えが見所です。

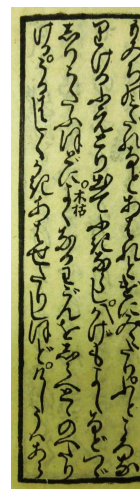
#### \* 14 小型本絵入源氏物語 帚木 江戸時代前期刊

袋綴60冊

濃紺地に雷文・蓮華唐草を艶刷りした紙表紙（縦14.3、横11.3糎）は押し発装を持つ古雅な原装。中央に金泥下絵斐紙題簽（縦7.7、横2.1糎）を押し、巻名を墨書する。本文は4周単辺内に毎半葉11行21字程度印刷、和歌2字下げ2行書きとし、末尾は直接地の文に続く。版心に「帚木 ○一」の如く巻名と丁数を刻す。

7 絵入源氏物語を受け継ぎ小型化した絵入り本で、しばしば目にするのは30冊もしくはそれ以下に合冊した伝本であり、60冊仕立ては珍しい。しかも1冊毎に題簽の下絵を変え、手書きするところから推すると、特別な注文品として制作されたのではないか。表紙ウラに版本の刷り反故が用いられていることも、書誌学上注目してよかろう。鮮明な刷り上がり、表紙もまた丁寧な造りである。古い木箱入り。

雨夜の品定めのかたり、浮気な女性「木枯らしの女」が左馬頭の経験談に登場する。絵の右側に室内で和琴を弾く「木枯らしの女」、左は庭に立って笛を吹く殿上人。「ふところ／なりけるふえとり出てふきならし…よくなるわごんをしらべとのへたり」と、右図版に掲げた本文は語る。



#### ● 15 奈良絵本源氏物語 明石 江戸時代前期写

列帖装1冊

濃紺地に金銀泥下絵の斐紙表紙（縦24.0、横17.7糎）。下絵は細密優美、各巻ごとに図柄を変え、掲出本では内容にふさわしく水辺の風景を描く。表紙左肩に金泥下絵朱地紙題簽（縦14.8、横3.5糎）を押し、本文と同筆にて「あかし 十三」と墨書する。見返し、金布目紙。本文料紙、厚手斐紙。本文は毎半葉10行17字程度、和歌3字下げ2行書き、2行目はさらに1字下げる。筆者は他にも奈良絵本の本文を書いており、職業的な能書であったらしい。当館にツレの賢木を所蔵。

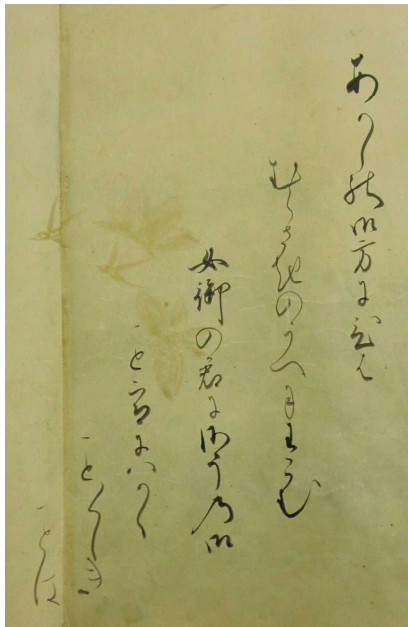
6 奈良絵本源氏物語に略説した通り、7 絵入源氏物語を手本とし図柄が一致、本文もまた同様である。奈良絵本が版本に先行する例は勿論いくらかも存する。逆に版本から生まれた奈良絵本も相当数見られ、『源氏物語』の他、『伊勢物語』『長恨歌』等あり。天地に薄藍の霞引きを施した濃彩の絵5面。絵の前では本文を散らし書きし、余白が生じないよう工夫する。この手法は奈良絵本にしばしば採用されるものである。

展示は、対坐する光源氏と明石入道。入道は、音楽にこと寄せて明石御方の話を切り出す。本文では入道が琵琶と箏の琴を持参したとあるけれども、左面の絵では箏のみ描かれ、やや簡略な図柄となっている。右面に、入道の詠みかけた「ひとりねは君もしりぬやつれ／＼と／おもひあかしのうらさびしさを」の和歌が見える。

### 16 源氏物語抜書 若菜下 中院通茂筆

卷子本1軸

藍地に瑞雲・龍等を織り出した金欄表紙（縦30.2、横26.7糎）は中国明の製品か。見返し、金布目紙。本文は蝶・鳥の金泥下絵斐紙（幅約48.5糎）を8枚継ぎ、礼紙1枚を加えて古い象牙軸に付ける。礼紙には後掲中院通躬（1668～1739）識語



と古筆了信の極書あり。『源氏物語』若菜下から六条院女楽の場面を抜き出し、ゆったりと散らし書きにしたもの。調度品あるいは手本として作られたのであろう。本文系統は、青表紙本系三条西家本に近い。

中院通躬の識語「此一巻者先人故内府通一公／真跡也今依所望為後／証加禿毫而已／正徳第四仲秋上浣／特進通躬」によって、通躬の父通茂（1631～1710）の書写と判明。水戸光圀と親交があった通茂は、歌人・歌学者として名高く、著述も多い。正徳4年（1714）は没後あまり経過しない時期。

展示箇所は女楽が始まる前のしつらいを語るころ、「さうのふえ左大将の／御たらうよこぶえと／ふかせて／すのこに／さぶらはせたまふ／うちには御しとねならべて／御ことどもまいりわたすひし／給御ことどもうるはしき／こむぢのふくろどもに／いれたるとりいて」とある。左上図版では「あかしの御方にびは／むらさきのうへわごむ」と、光源氏にとって重要な女性および担当楽器が語られ、金泥の下絵も見える。「わごむ」は「輪ゴム」ではありません、念のため。

### 17 源氏小鏡 文林堂須原屋茂兵衛版 江戸時代中期刊

袋綴1冊

濃紺無地紙表紙（縦23.8、横16.6糎）は古いものだが、補修され、原装か改装かを判定しがたい。左肩の隅切り楮紙題簽（縦16.3、横3.7糎）は後補。見返し、新しい厚手楮紙。本文は楮紙に毎半葉14行28字程度（印刷面縦約19、横14糎）、漢字平仮名交じりに刻し、難解な語句には夾注。句読点・濁点なし。現在1冊本となっているけれども、もとは桐壺～朝顔・乙女～紅梅・橋姫～夢浮橋の3冊仕立て。補修に際し改装合冊されたのであろう。内題は元の第3冊相当分のみ「源氏小鏡巻下目録／宇治十帖」とする。最終丁ウラに「江府文林堂 日本橋南一丁目 須原屋茂兵衛改正」の刊記。

半丁分の絵55面、画風から見て元禄（1688～1704）前後の刊行か。絵の数は『源氏小鏡』諸本中最大、しかしあまり流布しなかったようで、伝本は少ない。

箏の琴を弾くのは明石の女御もしくは女御から箏を譲られた紫上、篋子で横笛を吹くのは夕霧の長男のはずだが、26歳の夕霧自身のように見える。絵師はかなり大胆に場面を解釈したのであろう。

### 18 横本絵入源氏物語 若菜下 万治3年（1660）刊

袋綴29冊

藍色無地紙表紙（縦14.6、横21.0糎）は原装。表紙中央に楮紙題簽（縦10.5、横3.0糎）を押し、「きりつほ／はき／一」等と各冊の所収巻名を刷る。本文は匡郭なく、毎半葉16行15字程度（印刷面縦約12、横約18糎）、句読点・濁点・傍注あり。挿絵は4周単辺（縦1



1. 6、横17. 9糎)内に**7 絵入源氏物語**に依拠した図柄を描く。原図の縦長を横長画面に適合させるのが絵師の腕であろう。全巻にわたる朱書き入れ。**7 絵入源氏物語**同様本文54巻に系図・山路露・引歌・目案などを付して60巻とし、30冊に仕立てた。しかし現在引歌1冊を欠き、29冊存。夢浮橋末尾に「龍集万治三年庚子／除総一日／林和泉掾板行」の刊記。渡辺忠左衛門版が先行し、「林和泉掾」は埋木修正と言われる(吉田幸一『絵入本源氏物語考』)。

見開き左面に住吉社頭の神樂、右面終わりから3行目「さかきばをとりかへしつゝ、いはひきこゆる／御よのすゑおもひやる」と光源氏の栄華をことほぐ。

### 19 源氏物語 橋姫 色替外題本 江戸時代前期写 列帖装54冊

紺色地に金泥にて松原・秋草等を描く紙表紙(16. 1、横17. 0糎)は、各冊その絵柄を変えるが、巻の内容とは関係のない意匠である。押し発装丁なし。表紙中央に金泥下絵題簽(縦10. 6、横2. 5糎)を押す。その料紙は布目・具引き等と多彩、色変わりの凝ったもの。見返し、本文共紙。本文料紙、斐。毎半葉10行16字前後、和歌1字提げ2行書きとし、末尾は地の文へ続ける。奥書・識語等を持たないが、書風・装丁から見て、江戸時代前期の書写であろう。

月に照らされた宇治八宮邸で、大君と中君の合奏を薫が垣間見するところ。見開き右面、終わりから3行目に「うちなる人ひとり／はしらにすこしみかくれてびはを／まへに置てばちをてまさぐりにしつゝ」とある。

### ○20 袖中絵本雛源氏 合羽刷 丁子屋源治郎版 江戸時代後期刊 袋綴1冊

縹色地に鍬泥霞引き・菊の下絵を施した紙表紙(縦11. 3、横8. 3糎)は原装。その中央に香色題簽(縦8. 5、横2. 3糎)を押す、四重の子持ち枠中に「絵本／袖中 雛源氏」と刷る。本文の入隅形子持ち枠とあわせ、すこぶる凝った造りの掌品。巻頭に序文(1丁)・源氏香之図(2丁)あって、以下本文は『源氏物語』各帖の代表的な場面と和歌1首を半丁にまとめ、54帖分27丁。後見返しに「山路の露壺冊…右絵抄五十四巻也此六巻をそへて／源氏六十帖といふなり／丁子屋源治郎」と刻すのは、**7 絵入源氏物語**を意識した文言である。しかし図柄はこれと一致しない巻も多いので、制作事情・撰者・絵の粉本等、なお考究を要する。丁子屋源治郎は正宝堂・延宝堂と号した京都の書肆。

彩色部分は合羽刷り(型紙を用いたステンシル風の印刷法)で、無着色の版も存し、当館に1本を所蔵。両者を比較すると一見同版のようだが、巧妙な覆刻である。

展示は、向かって左側が橋姫巻。「はしひめの／心を汲て／たかせ／さす／棹の／しづくに／そでそ／ぬれぬる」の和歌と、大君・中君の合奏を垣間見する薫が描かれる。この本については、中野幸一「源氏物語の袖珍本」(『源氏物語の享受資料』Ⅲ近世資料)が詳しい。

#### IV 源氏物語に取材した遊び

源氏物語は、文学のみならず、美術工芸・音楽芸能そして遊びの領域にも大きな影響を与えました。物語に登場する男女や貴族文化の種々相が、時代を越えて人々のあこがれであったからでしょう。ここでは、珍しく、そして無条件に楽しい資料を御覧下さい。

##### \* 2 1 源氏品さだめ 江戸時代末期刊 結び綴 1 冊

雲・栞等を色刷りした厚手楮紙二つ折り表紙（縦18.3、横12.3糎）。中央の栞に「源氏品さため」と刻す。ウラ表紙は源氏香を組み合わせた文様を刷り、草草紙風の意匠とする。見返し「投扇興仕様」と題のある説明文と遊具の絵。本文は4周単辺（縦16.3、横10.5糎）中を6コマに区切り、巻名・図・得点数の多色刷り。版心に丁付「一（～五）」。第1丁オモテが序文なので、6（コマ）×9（面）＝54（帖）となる。ただし墨刷りのみの1丁が巻末に加わり、全7丁。付加された1丁は、近江八景に点数を割り振っている。点式を凝った仕立てとしたもので、緑絹の綴じ糸は原装のまま。江戸時代末期の出版であろう。伝本稀。

「無点」の花散里から始まる第1丁ウラ・2丁オモテを開いた。ひとつひとつ扇の模様を変えた色刷りの図が楽しい。得点のない花散里に「蝶横に／立たるは／二点ほうび」と補足説明があり、位置によってはおまけの点が加算された。

##### （参考）雛道具 投扇興 蝶・扇・点式1式

藍色地に菊・鶴・金雲等を描いた台（高さ約5.2糎）と的、扇（長さ約6.0糎）3本より構成される可愛らしい遊び道具。雛段用として作られたものであろう。奉書（縦19.1、横27.6糎）に薄黄色と紅で刷った「投扇興点式」が付き、「扇匠庵好」の文字が見える。源氏香をあしらい巻名と点数が示され、最高100点（胡蝶）・最低0点（花散里）。得点は一律ではなく、点式によって数の設定が異なる。

類似の遊びは正倉院の投壺まで遡りうるが、投扇興は安永2年（1773）考案（関忠夫『遊戯具』）。近代になっても花柳界を中心として流行、廃れることはなかった。ちなみに本学名誉教授岩佐美代子博士はご幼少のみぎり実際に遊ばれ——勿論花柳界と関係なく——、「また花散里！」の声が上がったそうである。上村松園（1875～1949）下絵の「投扇興点式」もあり、市場に出ると普通のものより値が高い。源氏香については、森口繁一「源氏香図の謎」（『UP』309）参照。

##### ● 2 2 源氏歌留多 塗箱入 江戸時代後期 読札・取札とも108枚1組

銀覆輪厚手料紙（縦7.6、横5.1糎）オモテ面に金箔散らしの白斐紙を使用。『源氏物語』各帖1首の和歌を選び、読札には巻名と上句と絵、取札は下句を書く。絵柄は当該巻と縁のある植物や風景とする。洒落た構図や色使いが魅力である。

掲出の歌留多は、人物を登場させない趣向で制作され、全体が一種の留守模様となっている。どの札も落剥・汚れ・手擦れ等ほとんどなく、緑地小葵文様の緞子帙や銀のコハゼに旧蔵者の心配りが偲ばれる。遊び道具と言うよりは、贅沢で気のきいた飾り物である。

若紫・紅葉賀・松風・紅梅・浮舟の読札、若紫・紅梅・浮舟の取札を展示。若紫の取札には「ねに／かよひける／野辺の／水草」と書かれており、ちょっとご愛嬌。勿論「野辺の若草」が正しい。

### ○23 源氏かるた絵合 洗心斎池田綾岡画 江戸時代後期刊

1 舖

厚手楮紙（縦39.0、横54.0糎）の疊物。中央に琵琶湖と石山寺を描き、その周囲は『源氏物語』各巻に由来する短冊形54枚で埋める。短冊形に源氏香と巻名を印刷した札が乗る遊び道具（中野幸一『源氏物語の享受資料』Ⅲ享受資料解題と目録）だが、現在その札を欠く。多色刷りの袋は残されており、「湖月抄」「源氏かるたゑあはせ」等の文字が見えるのは貴重である。

画面中央左寄りに「洗心斎綾岡筆」の署名があり、池田綾岡（通称奈良屋吉兵衛、1817～1887）の作。綾岡は団扇絵を得意とし、能書家でもあった。掲出資料は、比較的早い刷りか。『源氏かるた絵合』には、「江戸日本橋榛原」の朱印を押すもの、明治20年（1887）の後印もある。前者は、団扇絵を通じて綾岡と交渉のあった団扇問屋兼本屋の榛原直次郎の所用であろう。綾岡画・榛原刊の遊び道具に『ひやくにんしゅまはりすごろく』（「ひやくにんいっしゅ」ではない）がある。

### 24 源氏物語双六（付）うちやうの事 桐けんどん箱入

江戸時代後期刊 袋綴28冊・1舖

『湖月抄』を模し、薄く布目の跡がある縹色無地紙表紙（縦7.0、横4.9糎）、中央に朱題簽（縦4.8、横1.2糎）を押し、「源氏物語大意／目録」等と刻した豆本28冊。表紙・赤絹の綴じ糸から若松を描いた桐けんどん箱に至るまで、制作当時のままに伝来した遊び道具である。豆本は、1冊に2帖分の見返し絵・梗概・代表的な和歌各1首を収めた54帖27冊と、大意・目録の1冊で、合計28冊。これに、遊び方の説明書「源氏双六うちやうの事」（縦26.1、横42.6糎）が付く。掲出本に年次を示す文言はないけれども、寛延2年（1749）皇都新町吉田屋善五郎の刊記を持つ伝本があり、このあたりを初出と見たい。



豆本を駒として用い、最後に残った本の題簽に見える数字を合計、その大小によって勝負を決める。よく知られた廻り双六（絵双六）ではなく、盤双六の形式。双六は、奈良時代に禁令が出されているほど古くから親しまれ、江戸時代には碁盤・将棋盤に双六を加えて「三盤」（三面）と呼ばれたが、明治以降急速に勢いをなくした。

細部まで丁寧に作られ、しかも箱・説明書がそろった例は非常に珍しい。多くは豆本のみが、遊具の一部ではなく書物として取り扱われ、それすらかなり高価。完全な揃いは現存数組と言うところであろう。右上図版は、桐箱の蓋。